

「菡萏としてひろきにわたる詞」モノ

—— 土左日記の作中歌「ものの悲しき」をめぐって ——

西 耕 生

はじめに——本稿の概要

土左日記の作中歌「都へと思ふをもの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり」に詠みこまれた名詞モノについては、現在、漠然とした対象を指すとする通説のある一方で、異見も示されている。すなわち「一定してはいないが格別に強調する意味がある」（萩谷朴『土左日記全注釈』）、あるいは、「古い時代の基本的意味は『変えることができない、不可変のこと』であった」と概括して「自分ではどうすることもできない運命、なりゆき」（以上、大野晋『古典基礎語辞典』）を意味するなど説く解釈がそれにあたる。

本稿では、このような見解の相違を端緒として、名詞あるいは接頭辞のモノを伴った情意表現について、祖述と粗描を試みる。そうして、漠然性をあらわすとする通説をあらため、夙く富士谷御杖『土佐日記燈』などによって示唆されていたように、喜怒哀楽をはじめとする情緒の誘因が表現主体

をとりまいて遍満するありようを明示した用語として、古語モノを把握しなおそうとする。

一、亡き女兒への哀傷——通説とその異見

廿七日おほつよりうらと乎散してこ
支いつかくあるうちに京にてうまれ
たりし乎んななくくに、てにはかに
うせにしかはこのころのいてちいそ
支乎みれとなにことんいは数京へ
かへるに乎んなこのな支のみそかな
しひこふるあるひとく毛たへ数
このあひたにあるひとか支ていたせる
うた みやこへとおもふ乎毛の、かな
し支はかへらぬひとのあれはなり
けりまたあると支には あるのと

わ須れつ、なほな支ひと乎いつら

と、ふそかなしかりけるといひける

あひたに……

〔土左日記・某年十二月廿七日条〕

〔萩谷朴編『影印本土左日記（新訂版）』新典社、

二三～二四頁、平成十五年四月新訂16刷〕

土左日記某年十二月二十七日条の前半、二首の和歌を含んだ一節である。引用に際して字母表記を一部保持しながら翻字した、右の「青谿書屋本は、為家筆本の形を、ほとんど複製本ともいふべきほど忠実に転写したものであ」と評せられていいる。二首それぞれの歌頭に設けられた空白も、定家筆および為家筆両本の書写奥書に記されるごとく「紀氏自筆本」「紀氏正本」にさかのぼる書記様態を彷彿させて貴重である。在京時に生まれながら任国で急死した女兒を悼む歌に共通する、形容詞カナシと歌末の助辞ケリとが、人生の悲哀を端的に表わしている。

都へと思ふをもの悲しきは

帰らぬ人のあればなりけり。

第一首は、いわゆるナリケリ構文を用い、破線を施したごとく地の文に記す「京へ帰るに女兒の無き」現実をそのまま痛嘆した歌である。これを承けて第二首では、歌を導く前句「ある時には」とも密接に繋がって、

（ある時には）あるものと忘れつつなほ

亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりける。

と、死別した「亡き人」をややもすれば此の世に「在るものと忘れ」ているもう一つの現実を詠んで、前歌の痛嘆を半面から支えている。

もつとも、両首は同工というわけではない。悲しみの対象を具体的に「（なほ）亡き人をいづらと問ふ（ぞ）」と示す後者に対し、前者では、なにと特定せず「もの」と言うにとどめている。ちなみに第一首の「もの」を意識して、第二首も「あるもの」と詠み始められたのであろう。

この一首目に配された「もの」をめぐっては、
1. 「もの悲しい」という一語にまとめる

(a) いよいよ都へ帰るのだと思うのに、何かにつけてもの悲しい思いのするのは

〔日本古典文学大系20二九頁頭注二五（岩波書店、

一九五七年十二月第1刷・一九七九年四月第23刷）

(b) 懐かしい都へ帰ると思うにつけても、もの悲しい気分にとどざされるのは〔新潮日本古典集成本一四頁頭注一

（新潮社、一九八八年十二月）

といった通釈が行なわれていたけれど、現在では、おおよそ次のような誤解が大勢をなす。

2. 「何かしら」「何となしに」と意識する

(c) いよいよなつかしい都へ帰るのだと思うのに、何かしら悲しいのは

〔日本古典文学全集9三二頁下段口語訳

小学館、昭和四十八年三月初版・

昭和五十七年十月第十三版〕

(d) さあ、あのなつかしい京の都へ帰るのだと思うのに、心が躍らず何となしに悲しいのは

〔鑑賞日本古典文学第10巻『王朝日記』三五頁口訳

角川書店、昭和五十年七月初版・

昭和五十四年五月3版〕

(e) いざ都へと思うにつけても、何かしら悲しいのは

〔新編日本古典文学全集13一八頁下段口語訳

小学館、一九九五年十月〕

即ち、「もの」は漠然とした対象を指す。⁵⁾ というわけである。

ところが、2.のような通説に対して異見も示されている。

3. 「何かにつけて」むやみに」と意訳する

(f) 「ものの悲しきは」は、漠然と「何となく悲しいのは」と訳し、やすいところであるが、それでは意味をなさない。悲しみの度合がはなはだしく薄弱となるからである。もちろん、なぜ悲しいと始めからハッキリ意識しているわけではないが、何かにつけてむやみに悲しいのである。「もの」には一定してはいないが格別に強調する意味がある。「ものものし」「ものけ」「もののはれ」「もののかず」などの場合の「もの」

「褊褊としてひろきにわたる詞」モノ

は、そのような特別の意味を持っている。

〔萩谷朴（日本古典辞書叢書）『土佐日記全注釈』

九五頁釈（角川書店、昭和四十二年八月初版）

七五調に趣向を凝らした以下の訳文からも、萩谷博士の一貫した注釈姿勢がうかがわれよう。

(g) みやこへの歌―都へ帰るそのことは、思うも嬉しい

はずなのに、むやみに悲しめてならぬのは、生きて

いっしょに帰れない、いとしあの子があればこそ。

〔萩谷朴編『影印本土左日記（新訂版）』二四頁頭注

（新典社、平成十五年四月新訂16刷）

「漠然とした対象を指す」とする通説への批判は肯なわれるものの、モノを「強調語。」とする注解には、なお行き届かぬ憾みを覚える。「一定してはいないが格別に強調する意味がある」という解釈は一体、どのようにしてもたらされるのであろうか。

その一方で注釈書をさかのほれば、(f)の二重傍線箇所⁶⁾に補なわれている「何かにつけて」が夙く(a)に用いられていたことと併せ、(b)の破線箇所⁷⁾（もの悲しい気分）にとゞさされる」という綿密な訳解にも留意されるのである。

本稿では、あらためて古語モノに関する従来の注説を顧みながら、連語「なにとなく」の解釈とも絡め、少しばかり私按をめぐらせることとしたい。

二、「なにとなくなき心」——富士谷御杖の注解

「都へと」の歌に配された「もの」については、夙く、富士谷御杖が「くはくナリケリ」の「うちあひ」（呼応）にも注意しながら説いている。少々長くなるけれども、以下に引用する。

○もの、云々物とは「物わひし」「物うし」「物へまかる」「ものするなとうたにも文にもいへるかことく事にまれ處にまれその名をさ、すしておもはする詞なりこれらも大かた詞はものにせまりてつくましければなり……〔中略〕……その名をさすときは只その一條にかざるをものといへは菴菴としてひろきにわたる詞となるか故になにとなくなき心なりと志るへしかなしといふ義はまへにいへり○はもしは下のなりけりうちあひなりすへて何は何也けりといふ脚結はた、その故をことわる詞也と心江たるはくはしからすはもしもと多かるもの、中にてその分別をたつる詞ながら……〔中略〕……すへて自然拔群のかたちあり又けりもおもふにはことなるよしをいふ詞なればた、故をことわるのみそはあらで常にたかひてありけることをみつからにおとろける心なりかくみつからおとろく心によむは即その分別を人にことわりきかする用なりと志るへし

〔土佐日記燈卷之二（国光社版、一八九八年）百八頁・百九頁。傍線・鉤括弧等原文のママ。引用に際し異体かなの一部を現行の字体に改めた。なお太字表記は西。〕
古語「もの」とは、「事」であれ「處」であれ「その名を指さずして思はする詞なり」——こう前置したあと更に、対象として「その名を指す時は只その一條にかざる」のに対し、「もの」と言い表わせば「菴菴としてひろきにわたる詞となるが故になにとなくなき心なりと知るべし」と説き及ぼす。前置きだけなら、表現対象を漠然と指す名詞であると認識しているように見受けられるかもしれないのだけれど、細説する後半まで含めると、全体として、「菴菴としてひろきにわたる詞となるが故に」「もの悲しき」という歌句は「なにとなく悲しき心」を言うのと弁えるべし、と説いた注解であると把握される。ここで、その行論に二階梯ある点に留意したい。

(一)モノの布置により「菴菴としてひろきにわたる詞となる」

(二)ゆえに「ものの悲しき」とは「なにとなく悲しき心」を言う

ここに、『もの』なにとなく』という私どもに親しい図式もおのずから析出される。かくして、御杖の注説を検証する要件として、(一)「菴菴」と、(二)「なにとなく」と、二つのパラフレーズに関する正確な理解が求められることとなる。

ではまず、(一)のほうから検討しよう。

字書に拠れば「菴菴」とは、「氤氳／網縕／烟燼／茵藎」などとも表記され、万物生成の根元とみなされる気が盛んなこと。気があたりにたちこめていいるさま。を意味する。現在耳慣れぬこの漢語は古くから用いられていた。

……徒ニ觀ルニ夫レ一人日ヲ慎ミ、四方雲ヲ觀ル。……
求メ而必又致ス、五葉浪ニ浸ス之痕氤氳タリ。……

〔本朝文粹卷第一・賦・幽隱・視雲知隱賦、大江以言
訓讀は『本朝文粹註釋』上冊八六頁を参照。〕
例えば右の賦に配された「氤氳」について、柿村重松博士
が、

○氤氳。易、繫辭傳云、天地網縕、萬物化醇、釋文
云、網縕本又作「氤氳」、漢書、楊雄傳、網縕玄黃注云、
天地合レ氣也、一切經音義五云、氤盛貌也、杏也、

〔柿村重松『本朝文粹註釋』上冊八七頁〕
と簡潔に注せられるごとく、漢籍や經典に見える典拠ある措
辞として平安期によく知られていたことがわかる。古辞書に
はこれら関連する各々の字義や字訓を、以下のごとく解説す
る。

氤（紆文於云ニ反无氣也）

〔天治本新撰字鏡卷一・气部第六 17ウ⑦〕

（臨川書店版・四八頁）以下（ ）は割注。

藎藎（二同許文於郡ニ反平積也最也藎也藎聚也藎也

〔菴菴としてひろきにわたる詞〕モノ

藎也藎也藎也盛也）

〔天治本新撰字鏡卷七・草部第七十 18オ⑥〕⑦

（臨川書店版・四二二頁）

網（一因 細縕元氣）

〔觀智院本類聚名義抄法中63オ④〕

（新天理図書館善本叢書第十卷・二五七頁）

以下（ ）は割注、声点は省略。）

焜（焉採又 又一氤）

烟（无氣、上一燕 又因 カマト ケブリ モユ
禾エン）

〔觀智院本類聚名義抄仏下末20ウ⑧〕21オ①

（新天理図書館善本叢書第九卷・四四四～四四五頁）

藎（或媪字 サカリ）……

藎藎（下正上 焜又上声 アツム ツ、ム カクス タ

クハフ ツモレリ キハム ハカル ツム アツシ

ウツモル オモヒ ユタカ フ爪フ 于問又 上温乱

、）

藎藎（下正於問又 又於粉又 ツ、ム アツム ツモル

フ、ム アカム タフトシ 又作藎）

〔觀智院本類聚名義抄僧上14ウ⑦〕15オ①

（新天理図書館善本叢書第十一卷・三三二～三三三頁）

氤（紆文又 フ爪小ル フカシ 呉、雲）

氤氳（宜作 藎藎）

〔観智院本類聚名義抄僧下57才⑥〕⑦

〔新天理図書館善本叢書第十一卷・四〇九頁〕

時代は下るけれど、江戸後期の国学者が説明しようとしたモノの意味も、活気の遍満しているさまと捉えて過たぬであろう。つまり、「もの」と言い表わすことによつて対象が一つに限定されず、喜怒哀楽などの感情の誘因が全般にわたつて存在しているさまを言い表わそうとした、と理解するのである。したがつて「菴菴としてひろきにわたる詞となる」とは、厳密には、漠然性の謂いではないと考えられる。

次いで、このように理解されるべき「もの」を御杖がさらに言い換えた②「なにとなく」にも、従来のごとく、暗黙のうち現代語ナントナクを漫然とあてはめて済ませるわけにはいかない。少なくとも平安期より漢文の訓詁を介して和漢の文章に通用されてきた副用語「なにとなく」には、この「菴菴としてひろきにわたる詞」という説明に矛盾することなくふさわしい用例が、確実に見出だされるからである。

①四月、祭のころいとをかし。……木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、若やかに青みわたりたるに、霞も霧も隔てぬ空のけしきの、何となくすずろにをかしきに

〔三卷本枕草子「ころは」の段（和泉古典叢書Ⅰ）

②宮の御前の、御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど・何となくた・……めでたきを、

さぶらふ人も思ふことなき・心地するに……

〔三卷本枕草子「清涼殿の丑寅の隅の」の段

〔能因本の校異本文は「校本枕冊子」に拠る。〕

③志ようねんの春ハおしめども、とまらぬもの物なりければ、やよひの中のとをかころにもなりぬ。御まへのこたち、あをミわたりてなにとなくくくらき中に……

〔伝慈鎮筆本狭衣卷一（狭衣物語諸本集成第三卷）

なお私に清濁を分かち句読点を施した。〕

④おほかたは、歌はかならずしもおかしき節をいひ、事の理を言ひ切らんとせざれども、本自詠歌といひて、たゞ読みあげたるにも、うちながめたるにも、なにとなく、艶にも幽玄にもきこゆる事有なるべし。

〔慈鎮和尚自歌合・十禪師・跋、藤原俊成

〔日本古典文学大系74〕

⑤……世上騒しき時節なれば、詩歌を奉る騷人も無く、絃管を調る伶倫もなし、適上臥したる月卿雲客も、何と無く、世中の乱又誰身の上にか来んずらん、と魂を消し肝を冷す時分なれば、皆眉を擡め面を低てぞ候ける。

〔太平記卷第一・資朝俊基関東下向事付御告文事

〔角川文庫〕私意により句読・表記等改めた。〕

共説の係助詞「も」と共起する④⑤⑥がわかりよい典型と見なされる。即ち、中古中世にわたつて見られる副用語「なにとなく」には、現在通例の漠然性とは違つて、「なにと特

に限定せず（何もかも／誰彼となく）などと解しうるような。不特定から悉皆を暗示して全体に及ぼそうとする。例が見とめられるのである。

とりわけ枕草子④で叙せられる、身近に「さぶらふ人も思ふこと（屈託）なき心地する」定子中宮の「めでたき」姿には、一点の曇りもあるはずがない。すなわち三卷本の「なにとなく」は、漠然の意に解してはならないのである。これに對して、中宮の麗姿を「たゞ何事ともなくよろづにめでたきを」と叙する能因本の異文は、「なにとなく」の含意をむしろ説明的に言い換えた趣を持つていと評してよいであろう。漫然の意を担う「すずろに」をすぐあとに続けている枕草子④が、「なにとなく」との語意の区別を如実に示している。

平安期から副詞的用法の見とめられる「すべて」が、動詞「統ぶ」の原義にちなんで「統攝」しようとする観点から全体を明示しようとするのに對照させて、不定代名詞の打消を核とする連語「なにとなく」のほうは、いわば発散しようとする観点から全体を暗示しようとする、副用語である、と把握できようか。

④『さびころも』こそ『源氏』につぎてハよをばへはべれ。
「初年のハるハ」とうちハじめたるより、ことはづかひ
なにとなく、江むにいミじく上ずめかしくなどあれど、
さしてそのふしと、りたて、心にしむばかりのところな

「菝菹としてひろきにわたる詞」モノ

どハいと見えず。又さらでもありなんとおぼゆることも
おほかり。

〔水府明德会彰考館蔵建久物語（笠間影印叢刊43七四頁）

鉤括弧・句読・清濁は私意。〕

いわゆる無名草子に見えるこの用例④も、源氏物語に次ぐ世評ある狭衣物語について、「少年の春は」と叙する冒頭を初めとした「ことばづかひ」（用語 全般が「上種めかしく」（貴人ぶつて）ある割には、肝銘すべき箇所が乏しい点を批難した一節と解さなければならぬ。

「もの」といへば、菝菹としてひろきにわたる詞となる
が故に、なにとなくかなしき心なり、と志るべし。

御杖がこんなふう^⑤に結論づける筋道をあらためて辿ってみれば、「菝菹としてひろきにわたる」形式名詞と、不定代名詞の打消を核とする連語と、両語を結びつけるその理路は整然としているであろう。古語「もの」と連語「なにとなく」とは、表現対象が何と一つに特定されず全般にわたっている様子をあらわすという意味において、通底している。ここに、

《もの＝なにとなく》

と析出される図式から導き出されるのは、不定から導かれる漠然性でなく、むしろ不特定から悉皆を介しての遍満性だと想い到るのである。

三、「もののわびしき」山里——古今集の用例など

喜怒哀楽をはじめとする情緒の誘因が主体をとりまいて遍満しているさまを表わす「もの」。このような名詞は、土左日記の作中歌だけでなく、もとより平安期の歌文に見出だされなければならぬ。

① 山里はもののわびしきこととき(元雅)家前伏信高次こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

〔古今和歌集卷第十八・雑歌下・九四四、よみ人しらず／新撰和歌集卷第四・恋雑・二五三、第二句「ものさびしかる」／和漢朗詠集卷下・山家・五六三、第二句「ものさびしかる」／正保版本歌仙家集本小町集・一一〇〕
 「世の憂き」暮らしに比べれば、脱俗により孤絶した「櫻慄」が身にしむ「山里」も「住みよ」いものだ、と詠みなした歌。その第二句を「ものさびしかる」と作る異文も併せ、「もの」は、「わびし／さびし」という感情の誘因が「全体的、雰囲気的に」^②たちこめている様子を明示した措辞だと考えられる。

また、以下に掲げる、③として一括しうる四首のうち、私家集の(1)は伊勢作として後撰集(4)に収められる一方で、古今集(2)や新撰和歌(3)ではよみ人知らずの一首として収められている。「苦しき」を「悲しき」と作る腰句、「いづこ」を「いづれ」と作る第四句、および「涙」を「心」と作る結句が、

大きな異同である。

物いみじうおもひはへりしころ

①(1)わびはつるときさへもの、くるしきはいづこをしのふ
 なみたなるらん

〔西本願寺本三十六人集いせ・一二六／島田良二蔵本伊勢集・一四三、「物のかなしき」／正保版歌仙家集本伊勢集・一四〇、「物のかなしきはいづくを」

(以上、新編私家集大成による。)

(題しらず　よみ人しらず)

あふことのもはらたえぬる時にこそ人のこひしき事も
 しりけれ

(2)わびはつる時さへもの、かなしきはいづこをしのぶな
 みだなるらんころ(歌元歌)

〔古今和歌集卷第十五・恋歌五・八二一〜八二二〕
 (3)わびはつる時さへもの、かなしきはいづれをしのぶ心
 なるらん

〔新撰和歌集第四・恋雑・三二八・不記〕
 をとこわすれ侍にければ　伊勢

(4)わびはつる時さへ物のかなしきはいづこを忍心なるら
 む　〔後撰和歌集卷第十三・恋五・九三六〕

(1)や(4)の詞書を重んずれば、恋の終局をいう「わびはつる時さへ」は、伊勢自身の苦衷を思わせる。男に忘れられたにもかかわらず、あきらめ切れずなおもこぼれる我が「涙」

(あるいはなおも「偲ぶ心」のやるせなさ。対象となる相手がいなくなつてもなお心ひかれる自己を省察するところから、「もの」そして不定代名詞「いづこ」(いづれ)¹⁶⁾が選択されたのにちがいない。

かくして、古今集(2)の直前に排列された八二番の歌の第四句「人の恋しき」との相違も得心されよう。逢会の途絶した「時にこそ人」恋しさを思い知るといふ現実の皮肉を詠むこの一首にあつては、「人」こそが焦点となるのである。

あるいはまた、「憂しと思」うのに「恋し」く思う矛盾したあり方を、「人」(相手)の「いづこ」に惹かれる我が「心」と自問する、次のような詠作も参照してよい。

〔女につかはしける　よみ人しらず〕

うしと思物から人のこひしきはいづこをしのぶ心なる覧
〔拾遺和歌集卷第十二・恋二・七三二／同巻第十五・恋五・九四四〕題しらず　よみ人しらず〕ト
シテ重出／拾遺抄卷第八・恋部下・三〇六〔だいよみ人しらず〕

これらに対し(2)では、対象を特定せず「わび果つる時さへもの悲しきは」と、より一般化して恋心の「悲し」さを詠んでいる。「人」という具体的な対象が失われたにもかかわらずなお「偲ぶ」、心向きを問うているのだから、総じて⑧のもと一括される(1)～(4)の歌々における情意の対象は「もの」と表現する以外にすべし無いのであつた。

「菴菴としてひろきにわたる詞」モノ

ゆえに、平安末期の次のような詠歌⑨も、一連の「秋歌中に」¹⁷⁾おいて慎重に解釈し直されるべきかと思う。

秋歌中に

ふきわたす風にあはれをひとしめていづくもすこき秋の夕ぐれ

⑨おぼつかな秋はいかなるゆへのあればすゞろにもの、かなしかるらん

⑩なにごとをいかにおもふとなければともたもとかはかぬ秋のゆふぐれ

⑪なにとなくものかなしくぞ見えわたるとはたのおもの秋の夕ぐれ

〔山家集(陽明文庫蔵)二二八九～二二九二〕

まず、右四首のうち唯一「秋の夕暮」と明示していない⑨は、大和物語に収める次の歌C'¹⁸⁾に依る。

おなじみこ(故式部卿宮)の、ひとに久しうおハしまさゞりけれバ、秋のこと也。

C' 世にふれば恋もせぬ身の夕、さればすゞるにもの、かなしきやなぞ

とありけれバ、御かへし、夕暮に物おもふことハ神無月われも時雨にをとらざりけり

となんありける。心にいらでなん、あしう読給ひける。

〔鈴鹿本大和物語十九段(和泉書院影印叢刊28)〕

私意により清濁を分かち句読を施した。) 右の十九段において、C以下の贈答歌にふれる前に「秋のこと也」と限定する導入から、この章段では「秋夕」が恋の不如意をかこつ重要な設定であることがわかる。二重傍線を施したように、本歌Cの情意表現をあらわに踏襲したCの詠みぶりが、本歌の趣旨をあらたに展開して問い直した「秋歌」の趣向となっている。西行は巧みに本歌の腰句「夕されば」を言外に暗示しているのであった。¹⁹⁾

趣向を凝らした第二首Cを含め、第一首から順に「いづくも凄き」「漫ろにもの悲し」「何事をいかに思ふと無けれども」と詠み継ぎながら第四首まで、いずれも「秋(の夕暮)」が醸し出す悲哀あるいは寂寥感を詠んでいる。なかでも特に、CとEとに「もの(の)悲し」のごとく名詞あるいは接頭辞のモノを伴う情意が共通して詠みこまれている点に注意したい。

第一首「ど、こも、かし、こも、秋の夕暮に吹きわたってゆく風にひとしく、あわれを感じるのを詠じた歌」²⁰⁾に依じて、第四首Eでは、「何と限ることなくすべて、が、しみじみと悲しく見えわたる、鳥羽田の面の秋の夕暮」よ、と詠嘆しているのはいか。腰句「見えわたる」が、初句を「一带・一面・全体に」の意であることを支えている。「なにとなく」とは、「もの悲し」の遍満性をひきだし顕在させた歌句だと理解されるであろう。

そうして、漫然や漠然を意味するのはむしろ、CやCに見える措辞「すずろに」のほうだと考えられる。Cの上句に配された「おぼつかない」「いかなる」といった用語もこうした解釈を堅固に支えているのである。

E(剃髪シタ惟喬親王ノ隱栖スル) 小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでてをがみ奉るに、つれづれといものがなしくておはしましければ、ややくしくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけり。

〔伊勢物語第八十三段(角川ソフィア文庫)〕
やや時代をさかのぼって、小野に隱栖する惟喬親王の暮らしぶりを叙する伊勢物語の章段に用いられた「ものがなし」。「物悲し」とは、悲しさがそのあたりに満ちていて、人があるところにあるのをいう。²²⁾ 遍満する悲しさとはつまり、無常觀に繋がる人生の悲哀を象つていよう。そしてそれは、「ものわびしき」山里を詠んだAとも遙かに相通じているのにはちがいない。

四、「もの」のニュアンス——情緒の遍満する世界

幼い愛娘の死を悲しむ土左日記の一首は周知のごとく、後世、説話として伝わってもいる。子の性別や年齢の訛伝はいま措いて、例えば、宇治拾遺物語に収める説話と比べその

「さま。この日記にすこしかハれるやうなれど。此うたハ紀氏乃よめるよしハ分明にこそ」(土左日記抄上13ウ)と、詠歌主体を貫之自身に比定しようとする北村季吟の説など具わっている。が、ここでは、詠歌内容に関わる和歌の措辞に注目したい。

みやこへとおもふ乎 **毛の**、かなしきはかへらぬひとの
あはれはなりけり

〔土左日記・某年十二月廿七日条(新典社版影印)〕
みやこへといそくにも **もの**、かなしきはかへらぬひとの
あはれはなりけり

〔和歌體十首・直體・一五(日本名跡叢刊36)〕
ミヤコヘト思フ心ノワビシキハカヘラヌ人ノアレバナリ
ケリ

〔今昔物語集卷第二十四・本朝付世俗「土佐守紀貫之、子死讀和歌語第四十三」(日本古典文学大系25)〕
宮こへとおもふにつけてかなしきはかへらぬ人のあはれは
なりけり〔宇治拾遺物語下・一四九「貫之歌事」〕

(新日本古典文学大系42)〕
みやこへとおもふにつけてかなしきはかへらぬひとのあ
ればなりけり〔古本説話集上・四一「貫之赴土左任事」

(新日本古典文学大系42)〕
〔于時天慶八年冬十月壬生忠岑撰〕と漢文体の序に記すも
の内部徴証から忠岑に仮託した書と考えられ、藤原公任と

「菴菴としてひろきにわたる詞」モノ

同時代頃の成立と目されている和歌體十首では、第二句を「いそくにももの」と作り、「思ふ」が「急ぐ」に変わっている。はやる気持を具体的行動として明確に印象づける歌句本文となっている。

これに対し時代の下の説話集では、土左日記に「かなし」とあるのを「ワビシ」と作る今昔物語集にも注意されるけれど、それ以上に注目すべき本文異同がある。和歌體十首においても保たれていた、「もの」が無くなっているのである。説話では動詞「思ふ」が保たれている一方で、すべて「もの」を有たぬ歌句に変わっている。

「もの悲しき」のごとく「悲し」の対象を「もの」と表現することは、感情の誘因がなにと一つに限定されることなく全体にわたって遍満している様子を表わすこととなる。「強調語」だとする萩谷博士が「何かにつけてむやみに」と説かれたのも、古語モノが漫然や漠然の域にとどまらず、対象をそれと個別に指示できぬ不定性を介し普遍性にまで行き届いていることを無意識に察知された明証ではないか。「一定してはいないが格別に強調する意味がある」とは、おそらくこの謂いであろう。このような見地からは、「もの悲しい気分にとざされる」(新潮日本古典集成本一四頁頭注一。傍点西。)という意識はいかにもふさわしいものであった、と反芻される。

「もの」を伴わぬ歌句の形は、いつのまにか、こうした

遍満性のニュアンスが忘れられ不分明となり、転訛・改変された結果であると考えられる。即ち、今昔物語集を初めとする三つの説話は「同原と思われるが、素材を一にする土左日記、十二月二十七日の条とは発想を異にする」のである。

土左日記の地の文に記す「京へ帰るに女兒の無き」現実を、素直にそのまま詠んだ歌——「都へと思ふをもの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり」。

此直體義實以無曲折為得耳

此ノ直體ハ、義實ニシテ曲折無キヲ以テ得ト為スノミ

〔和歌體十首・直體（訓読は私意）〕

和歌體十首に掲げる「直體」の実例として、「もの」は不可欠の措辞にちがいない。にもかかわらず、そのような要語を持たぬ言い回しで採録された後世の説話においては、日記当初に綴られた「悲しび恋ふる」歌の心に少なからぬ変質がもたらされているように思われる。

ここに、万葉集巻第十九の首尾において春愁を繊細に詠み分けていた、大伴家持の歌も思い合わせられる。

春儲而物悲_ル夜ふけて羽ぶき鳴く鳴誰が田にか住む

（四一四一）

春野_ル霞多奈毗伎_{宇良}悲_レこの夕影にうぐひす鳴くも

（四二九〇）

うらうらに照れる春日にひばり上がり情悲もひとりし思

へば

（四二九二）

たんに「悲」と詠まずモノ・ウラ・ココロと訓まれるべき語を冠しながら峻別した詠みぶりからは、そのニュアンスの違いを読み取らなければならない。囑目の対象をそれぞれ、春野にたなびく霞、遅々たる春日に舞い上がるヒバリとはつきり詠みこんで、左注に記すごとく鬱屈した心（悽惻之意／締緒）を「展」ばそうとする、四二九〇番・四二九二番の両首にココロを意味する「宇良」「情」が冠せられたのは、むしろ当然のこと。文字どおり抒情の機能を果たそうとした二首に不可欠なのである。

これに対し四一四一番では、「見」翻翔鳴一作歌一首」という題詞を承け、春という季節を迎えての心持を詠み表わすべく「物悲」と詠む。霞や鳥や花や風など個別に言い定めることなく、それら春の風物のあれこれを包みこんで、「春儲而」と詠み始めている。「もの悲し」は、何によらず心の感じやすく傷むのをいう。^①つまり、対象をそれと指定せず、愁いの誘因が主体をとりまいて遍満している情態をいう要語なのであった。したがって、同じく春愁を詠んでいるからといって、仮に音数律が合っていたとしても、「物悲」を「宇良悲」に置き換えることなど到底できないのである。

遍満性をあらわす「もの」——富士谷御杖の説を祖述しながら述べ来たった本稿の立場は、西下經一博士の説に相渉つてもいる。源氏物語に多用される「もの」の使われ方を十九種に分けて整理する過程で、博士は、委細を尽くし次のよう

に説明せられた。

(p) 彌漫の状況をあらはす。……〔用例省略〕……
これらの用例が、普通に「何となく哀れな」といふ風に解釋されてゐるのは、「あはれ」「かなし」「心細し」などの感情が、特定の一つの事情からおこるのではなく、その時その場の状況一般から催されるからである。さういふ感情をおこさせる理由が一點に集中しないで、環境の全體の中にあまねく行きわたり、彌漫(びまん)してゐるのである。又かういふ感情をおこす主體の側からみても、自分の心がどちらか一方に集中して感情がおこるのではなく、自然の安らかな精神状態にをるままで、いつしかさういふ感情になつてをり、自分の心の全面にさういふ感情がゆきわたり、さういふ感情の中に自分がひたされるのである。このやうに感情が遍在し、彌漫する状況を「もの」といふ語が示してゐるので、この「もの」を、彌漫の状況をあらはす「もの」と考へるのである。

〔西下經一「源氏物語の「もの」」(『國語と國文學』昭和二十九年一月號(第三百五十七號)東京大學國語國文學會) 六〇七頁〕

そうして博士は、次のごとく締め括られてゐる。

「もの」はさまざまの意味をもつが、その最も深い意味においては、確かに一つの世界を意味する。それは自

「菴菴としてひろきにわたる詞」モノ

分の外にながめられる環境(外界)ではなく、自分がその中にゐる世界である。「われ」と「もの」とは主客の關係で對立するのではなく、主客がかさなりあひ、融和し、理解と詠嘆とのまつはる空氣の中において、その世界が活動する。その世界が「もの」であり、自分はその中に住んでゐるのである。普通に我々は客觀的對象をよく觀察して、對象の中に融け込むことによつて道理と美とを感じて感動するのであるが、はじめから道理と美とを含んでゐる詠嘆の世界が「もの」である。(『同右九頁』)

「彌漫の状況をあらはす「もの」とは、御杖の「菴菴としてひろきにわたる詞」という説明を布衍したとの印象を与えるかもしれない。が、「菴菴」と「彌漫」とはその含意を異にする。第二節で確認したように「菴菴」が万物生成の根元とみなされる気が盛んなこと、気があたりにたちこめてゐるさまを意味するのに対して、「彌漫」は、広くゆきわたる意は重なるものの「蔓莖(へハヒコル)」⁽²⁰⁾といったニュアンスも籠もる。これは、ほんやりしてつかみどころのない「漫然」や「漠然」にも一脈通じているであらう。

漫々(ハハ慢) 玉云虚廣、……マ瓜(ハハ)ハビコル
瓜(ハハ)口(ハハ)

〔図書寮本類聚名義抄(勉誠出版影印・二四頁)〕
漫(ハハ)慢 ミダリカハシ ハビコル ヨル サハカシ
クラシ ケカル マス(ハハ) ス(ハハ)ロ ケル タナヒク(ハハ)

〔觀智院本類聚名義抄法上（新天理図書館善本叢書

第十卷四六頁。へ）は割注。〕

「漫（々）」に与えられた字訓のうち、マスマスがいわば積極性に傾くのに対し、ハビコル・スズロは消極性に傾いていると評してよからうか。「菴菴」はもとより積極性を志向するといつてよいのであろう。本稿が、漠然性を表わすとする通説にならずむことなく、かつ現在耳慣れぬ「菴菴」をも避け、⁽³²⁾「遍滿」を用いようとする所以である。

◇……普門とは、普とは、遍滿法界、平等利人の義なり。

門とは、出入無得自在遊戲の義なり。自在遊戲は、すなはち、如來の事業威儀なり。……『金剛頂經』を准ずるに、普賢菩薩は、一切如來の菩提心なり。また、普賢とは、またこれ如法身なり。遍滿法界最妙善の身なり。故に、頌にいはいはく、「普賢法身は一切に遍じ、よく世間の自在主となる。無始無終にして、生滅なく、性相常住にして、虚空に等し」。……故に、『經』にいはいはく、「……一一の身分、一一の毛孔、一一の相、一一の隨形好、一一の福德、一一の智恵、量、虚空法界に等しく、重重無尽遍滿遍滿平等平等なり。よくこの義を解すれば、（身・口・意ノ）三密相應するが故に、速やかに大覺の位を証す」。

〔法華經釈・承和元年（八三四）二月開演（筑摩書房版

『弘法大師空海全集』第三卷、四一三頁〜四一七頁）

◇第四二五妙ノ境界樂ト者、卅八願莊嚴セル淨土、一切ノ万物美ヲ翳妙ヲ極タリ。見ル所ハ悉ク是レ淨妙ノ色ナリ。聞ク所ハ解脫ノ聲ヘニ（あら）不トイフコト無し。香味觸ノ境亦復是（の）如シ。……復如意ノ妙香タル塗香、末香、无量香ノ、芬馥して世界二遍滿セリ。若シ聞有ル者ノ、塵勞垢習、自然二起不。……又光明周遍シテ、日月燈燭用キ不。……毎日ノ晨朝ニ、妙花ヲ吹散シシ、佛土二遍滿ス。馨香芬烈シテ、微妙柔軟兜羅綿ノ如シ。……

〔最明寺本往生要集卷上（五一ウ〜五六オ）大文第二・

第四（汲古書院刊の影印篇・譯文篇を

参考に訓み下した。）

◇（万寿元年三月廿余日、法成寺薬師堂へ遷仏サレタ）六観音、金色の相好円満し、三昧月輪相現じ、無數の光明がかやきて、十方界にへむまんす。所有の色には、あまねく一切衆生を利益せんとおほしたり。

〔栄華物語巻第二十二・とりのまひ

（栄華物語全注釈四）

主客融和した「道理と美とを含んでゐる詠嘆の世界」とは、喜怒哀楽をはじめとする情緒の遍滿する世界なのである。情緒の遍滿するありようは、一面、「もの」に強い感覺性官能性を帯びさせることにも繋がっている。土左日記に「もののあはれ」の語が見えるのは偶然ではない。

そうして、「もの」に籠められたこのような微妙なニュアンスは、おおよそ平安後期にもなると失なわれてしまうと考えられる。院政期の辞書に「情」をスズロとよむ訓が見える⁽³⁵⁾もの、あるいは軌を一にする変移のあらわれの一つなのかもしれない。

人々の内面の深まりにつれて主客が分化していく、心の自覚の歴史。言い換えれば、アニミズムを感受する心性がいわば徐々に世俗化し分節していく過程——そのような世界観の変容が古代から中世への転換期にあたるかと思透されるのも、あながち偶然ではあるまいと思われる。

— 令和二年十六夜 —

注

- (1) 萩谷朴編『影印本土左日記（新訂版）』十二頁「解題」（新典社、平成十五年四月新訂16刷）参照。
- (2) 別れた人に「悲しび恋ふる」心情を端的に象った作例が具わっている。あるときはありのすざびにかたらはでこひしきものとわかれてぞしる。
〔古今和歌六帖第五・雑思・ものがたり二二八〇五〕
「恋しきものと別れてぞ知る」と作る下句はまた、「あるものと忘れつつ」と詠む土左日記十二月二十七日条の歌の措辞とも響き合うであろう。
- (3) 「いづこ」と比較して「いづら」の原義を説く、日本古典文学大系20六三頁補注一六参照。
- (4) 二首目に配された、「なき人」と対照される「あるもの」にもモノのニュアンスが込められている。本稿とは視点を異にするけれど、萩谷朴『土佐日記全注釈』（角川書店、昭和四十二年八月初版）九六頁〔釈〕に注意せられている。
- (5) 村瀬敏夫訳注『源頼朝土佐日記』一七頁脚注8（旺文社、一九八八年五月）参照。
- (6) 萩谷朴校注〈校注古典叢書〉『土佐日記』一〇頁頭注4（明治書院、昭和四三年三月初版・昭和五四年三版）
- (7) 大漢和辞典および日本国語大辞典第二版に基づく節略。
- (8) 「もの」「こと」を比較対照しながら語彙（史）論の観点から包括的に考察せられた、東辻保和『もの語彙こと語彙の國語史的研究』汲古書院（一九九七年九月）をいわば先駆として、近年においても例えば、次のような考説が具わる。

接頭辞「もの」を冠すること、[〔]「なんとなく」[〕]「漠然と」[〔]そのような感情であること[〕]を示す。情意性「もの」形容詞の基本的意味は、その漠然性であると考えられる。〔本廣陽子〕「もの」形容詞の意味

と用法の発展―源氏物語の果たした役割―(『国語国文』第七十七

巻第六号、京都大学文学部国語学国文学研究室、平成二十年六月)。

- (9) 西「古語」なにとなく「再考」―不特定から悉皆・普遍におよぶ副用語―(『愛文』第五十五号、愛媛大学法文学部国語国文学会、二〇二〇年三月)。

- (10) 『校本狭衣物語巻二』一三頁「校異」に拠れば、底本である元和古活字本はじめ比校本いずれも「御前の木たちなにとなくあをみわたりて木くらしき」のごとく作っており、「なにとなく」の位置が異なっている。

- (11) 図書寮本類聚名義抄(勉誠出版影印・三〇一頁 参照)。

- (12) 山田孝雄博士「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」には「すべて」は「總」「凡」「都」「渾」等の字の訓にあてたる國語なり。」と示された上、これらの字義について「多くの事物を統括して一概にして之をいふ義なることは一なるなり。」と説明せられている(寶文館、昭和十年五月、二二―二四頁参照)。

- (13) 以下に掲げる、新日本古典文学大系本二八四頁脚注参照。

▽藤原定家はこの歌の「わびし」に漢語「慄慄(りりし)」を当てている(伊達本古今和歌集)。文選・秋興賦「善乎宋玉之言曰。悲哉秋之為氣也。蕭瑟兮草木搖落而變衰。慄慄兮若在遠行」。登山臨水。送王將攝「掃」をふまえてこの一首を解そうとしたか。(新日本

- 古典文学大系5『古今和歌集』二八四頁脚注(一九九八年二月)

- (14) 片桐洋一訳注『古今和歌集』笠間文庫(笠間書院、二〇〇五年九月)三七―一頁脚注参照。片桐博士は、第二句について「物わびし」は、「何となくつらい」の意。『古今和歌集全評訳』(下)二九三頁、講談社、一九九八年二月)だと釈されたかつての解を改めておられる。

- (15) 「もの」について、「何かと」(旺文社文庫本二四三頁脚注(一九九八年六月)・注13前掲書二八四頁脚注等)また「何かにつけて」(注14前掲書三七―一頁口語訳)とする訳解が具わる。

- (16) 注3参照。

- (17) 山家心中集(妙法院蔵本)には「秋の哥よみ侍しに」という詞書で一

括される六首のうち第三・第四の歌として以下のごとく収められる。

秋の哥よみ侍しに

しかのねをかきねにこめてきくのみか月もすみけり秋の山さといほにもる月のかけこそさひしけれやまたはひたのをとはかりして

①なに事をいかにおもふとなけれどともたもしくる、秋のゆふくれ

②なにともなくものかなしく見えわたるとはたのをくは秋のゆふくれ

おほかたのつゆにはなにのなるならんたもとにをくは涙のゆかり

山さとは秋のすゑにおもひするかなしかりけり木からしのかせ

(山家心中集(妙法院蔵本)二二八―二三三参照)

- (18) 和歌文学大系21五四頁脚注(平成十五年七月 参照。なおこの脚注は大和物語のいわゆる流布本系本文に拠っているが、本稿では異本系の鈴鹿本に拠った。流布本で初句を「世にふれど」と作る以外、Gの歌に注目すべき歌句の異同は見られない(阿部俊子『校本大和物語とその研究増補版』三省堂(昭和二十九年六月初版)昭和四十五年十月三版)。

- (19) 「夕暮」と絞らず秋の「もの(の)悲」を前提とした言い回しが、山家心中集の詞書に見える。

修行してみちのくにへまかりたりしに、野、中につねよりもと

おほしきつかのみえしを人にとひ侍しかは、中將のみはかとは

これか事なりとまうし、かは、中將とはたれか事そとまたとひ

侍しかは、さねかたの御事なりとまうす、いとあはれにおほえ

て、さらぬたにものかなく、しもかれのす、きはのくみえ

わたりて、のちにかたらんもことをはなきやうにおほえて

くちもせぬその名はかりをと、めをきてかれの、す、きかた身にそ

する

(山家心中集(妙法院蔵)三三三〇)

実方中將の墓跡だと知って「いとあはれにおほえ」た西行が詠歌に及ぶ際、「さらぬだにものかなしく、霜枯れの薄はのく見えわたりて」という情況が記されている。「さらぬだに」とは、墓跡を見るまでもなく、悲秋を前提とする措辞であるにとまらず、秋を「もの(の)か

なし」と詠む彼の作例にも符合するところがあり、すこぶる興味深い。
二九〇番(◎)のほか、次のごとき詠作も見とめられる。

さらぬだに、秋はものみかなしきを涙もよほす小牡鹿の声

山おろしに鹿の音たぐふ夕暮にものがなしとはいふにや有ららん
鹿もわぶ空のけしきもしくるめりかなしけれともなれる秋哉

〔山家集・四三二～四三四(岩波文庫)〕

なお、陽明文庫本山家集八〇〇番の歌の詞書では、妙法院蔵本山家心中集三三〇番の詞書に施した傍線箇所を、実方の墨跡だと聞いた西行が「いと悲しかりけり、さらぬだにもあはれにおはれに」と記す。このような、カナシとアハレの交代がもたらす文意の違いは観過されるべきではない。西行の自撰私家集である山家心中集のほうが、本稿にとって自然な叙述であるように思われる。

(20) 新潮日本古典集成『山家集』八四～八五頁289頭注(新潮社、昭和五十七年四月)。傍点は西。

(21) 新編日本古典文学全集12『大和物語』二六七頁頭注に「すずろ」はなんとということもなく、心ひかれて、「情スロ」(字類抄)と注しているのはすこぶる示唆に富む。本稿第四節および注26参照。

(22) 西下経博士『古今和歌集新解』三〇三頁「語釈」(明治書院、昭和三十三年十月)参照。ちなみに、古今和歌集卷第十八・雑歌下・九七〇番の詞書「つれづれとしていと物悲しくて」の後半を「業平の心である」(笠間文庫本三八〇頁脚注)と説く向きもあつたけれど、近年では、伊勢物語と同じく「業平が感じた親王の様子」(新日本古典文学大系本二九一頁脚注)だと注せられている。が、本稿は、「親王の姿をのべたことばであるが、それは同時に業平の心に起った感情であり、主客の別はない。」と説く西下経一博士の立場に与りたい。(古今和歌集新解)三〇三頁「語釈」参照。

(23) 例えば、「もの」を伴って「悲し」と詠む、以下のような作例が見られる。

(父) 宮うせ給てのち、正月一日

「菰菰としてひろきにわたる詞」モノ

いむなれとけふしも、の、かなしきはとしをへたつとおもふなりけり

〔冷泉家時雨亭叢書本齋宮女御集・九四〕

女をうらみて、元輔
うきながらさすかに物のかなしきはいまはと物を思なりけり

〔冷泉家時雨亭叢書本小野宮殿集・七六〕

ときくまかる女に、こと八まかるときとて

うきながらさすかに物のかなしきは今はかきりと思ふなりけり

〔正保本歌仙家集本元輔集・二二〇〕

月あかき夜、そらすみていとあはれなるに

このよにはすむへきほとやつきぬらんよのつねならすもの、かなしき

〔道信集・四六/千載和歌集卷第十七・雑歌中・一〇九四〕「女のもとにまかりて、月のあかく侍けるにそらのけしき物心ほそく
侍ければ、よみ侍ける 藤原道信朝臣」

なお、道信集の「世の常ならず」という表現に着目して「喪中に、命のはかなさを深く嘆じて詠んだと見る」無常観への連想を読み取ろうとする説がある(私家集注釈叢刊11『道信集注釈』八七頁「補説」(貴重本刊行会、平成十三年五月)参照)。

(24) 古典ライブラリー版『和歌文学大辞典』一三二七頁(平成二十六年十二月)参照。

(25) 日本古典文学大系25『今昔物語集四』三四一頁頭注(岩波書店、昭和三十七年三月第一刷)参照。

(26) 三卷本色葉字類抄卷下(118ウ⑦「洲・辭字釋」)には「情スロ」徒寛然トクワニ「藩門坐蒲子ヒナ」と注す(尊経閣善本影印集成18・四八六頁参照)。なお注21をも参照。

(27) 青木生子『萬葉集全注 卷第十九』二〇頁【注】(有斐閣、平成九年十一月)、傍点は西。なお同書に「そぞろ物悲しい」(一九頁口語訳)とする口語訳には従えない。「そぞろ」は漫然を意味するからである。

(28) 表紙には論題を「源氏物語のもの」と作っており、内題とは異なっている。なお、注33をも参照。

(29) 三卷本色葉字類抄卷上(34才④)「波・疊字付」参照(尊経閣善本影印集成18・七三頁)。へ)は割注。

(30) 「彌漫」は、西下博士が「あはれ」「かなし」「心細し」などの感情形容詞との共起を重んじて用いられた語であったか。

(31) ちなみに「海漫々・直下ト見クタセバ底モ無ク旁ニハ邊リモ無シ」と始められる白詩「海漫々」には、はかばかしい古訓は見えない。太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(勉誠社、昭和五十七年二月)参照。

(32) 例えば三卷本色葉字類抄卷上(53ウ②)「邊・疊字付」では、「遍滿」に「アマ子」^{オモ} 詞 雑部 ヘンマン)と注す(尊経閣善本影印集成18・一一二頁参照)。

(33) 西下經一博士は、昭和二十九年の論考(本稿第四節および注28参照)に基づきながら「運命を意味する」一項を増補し、すべて(a)から(t)まで「二十種の物の意義」としてまとめ直された単著において、傍線箇所のごとく言及しておられる。

(p) 弥漫の情を表わす。「もの哀れ」「もの悲し」「もの心細けり」「ものはかなげ」の類。普通これらの「もの」は「何となく……」と訳している。それで誤りではないが、「もの」の意義を深く追及するという点からは不十分である。(……中略……)「物哀れ」は、「哀れ」から見ても「もの」から見て融和性・流通性・弥漫性をもち、それを辞書的解釈では「何となく哀れな」と訳すのである。

〔八物の意義〕(『平安朝文学』搞選書6、一七三―一七四頁、昭和三十五年四月)

通説の漠然性を容認せられている節も見受けられるようだけれど、これ以前、

「物」とは、自分を含んだ環境であるが、よい訳語がない。

〔古今和歌集新解〕二九八頁【略解】

(明治書院、昭和三十二年十月)なども明記せられていて、苦慮の跡が推察される。ただし最終的には、「もの」とは、異質なものをひとつづきのものとして考え、その中に自分が含まれていると考えるところの觀念であるとした(搞選書6「あとがき」二五一頁)と総括せられている。ちなみに、以下に掲げるような説明は、西下博士の説に包括されるであろう。

モノは平安女流文学では軽い接頭語ではない。モノ、アハレナリのモノは、ケハヒ、アハレナリ、サマ、アハレナリのケハヒ、サマのように、アハレナリの題目・対象である。そして、モノにはきまり、運命、忘れがたい過去の事実、逃れがたく身を取り囲む状況、周囲の状態、という大きな意味がある。モノ、アハレナリにはそれがはっきり現われている。(大野晋「モノとは何か」ものがたり、もののはれの意味)『語学と文学の間』七八―七九頁(岩波現代文庫、二〇〇六年二月)。傍点原文。)

詳細は、特に、西下博士『平安朝文学』(一〇六―一八二頁)について見られたい。

なお古語モノのニュアンスは、家持の春愁とともに、高市黒人の旅愁を詠んだ作歌を含め、上代にまでさかのぼり考察する必要がある。稿を改めたい。

(34) 西「ものゆかしがり」する心一狭衣の設定・異文・引歌にかんする覚書―(『愛媛大学法文学部論集 人文学編』第四十八号、二〇二〇年二月)参照。

(35) 注26参照。ただし「情スミヤカ」の訓にあるいは「コ↑↓ス」の転訛の蓋然性を考えておく余地が、かすかにあるのかもしれない。

(にし こうせい)／愛媛大学法文学部／日本古典文学)